
God a crest ~ **神の紋章** ~

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God a crest 神の紋章

【Nコード】

N2677X

【作者名】

時雨

【あらすじ】

神の存在を一切信じていない高校生、水谷 空。

とある日を境に彼は神の力を手に入れることとなる。

しかし、それは、彼の人生をも狂わす危険な戦いの幕開けでもあった。

神を信じぬ者（前書き）

初投稿でどうなるかは分かりませんが、どうぞご覧ください！

神を信じぬ者

人は何故、神を信じるのか。

神様に願い事をすれば願いが叶うのーとか、勝利の女神はまだ見放していないーとか。

そんなのただの幻想、思い違いにすぎない。

もし、あたったとしても、そんなのまぐれだ。

神なんて存在しない。

俺、水谷 空はそんなふうに考えていた。

そう、あの日までは・・・

4月

俺は聖神童学園の入学式に出ていた。

進学の原因？そんなのはなから無かった。

ただ家から近いのと、この学園は自由に学科を選択できるから楽に過ごせそうだと思ったからという理由である。

それと・・・いや。今はやめておこう。とても面倒な理由だから話さないでおこう。

入学式が終わり、俺は、体育館入り口に張り出されいたクラス表を見て自分のクラスに行った。

「えーとB組はー・・・つと、ここか。」

クラスを見つけて自分の席についてひとつ伸びをしたところに男子と女子が一人ずつやってきた。

見るかぎり身長は俺と同じぐらいだな。

「やあ。俺、高橋 廉。よろしく！」

「私、葉月 未来。よろしく。」

「あ、ああ。俺、水谷空。よろしく。」

握手を交わすと、

「ところで空、お前学科はどうするんだ？」

「んーまだ決めてないけど、一応、神話学科かな。」

「へー奇遇だな。実は俺もなんだ。」

最初に言ったようにこの学園には様々な学科がある。

神話学、妖精学、悪魔学など、他にも様々な学科がある。

そのうち、俺と廉は神話学、未来は妖精学を選択していた。

「そんじゃ行きますか相棒。」

「いつから相棒になった。」

「いいから、いいから、早く行こつぜ！」

「チヨツ、、おい！」

こうして俺の波瀾万丈の学園生活が始まった。

神を信じぬ者（後書き）

今回、初めての投稿となりました。時雨です！
まだまだ半人前ですが、頑張っていきますので、応援よろしくお願
いします！

儀式と紋章（前書き）

遂に第2話突入です。
今回も頑張ってかきました。

儀式と紋章

入学一発目の授業は、神話学のガイダンスだった。
そこに立っているのは先生なのだが・・・

「なあ？」

「ん？」

「あの人誰？」

「生徒会長の黒羽 雄介さん。ほら、入学式の時、壇上でスピーチしてたろ。」

そういえば、確かに話してたな。

「えー、それでは皆さん、これから儀式を始めます。」

儀式？

「あの、先生。その儀式って何なんですか？」

「自分の持っている神の力を知る儀式です。」

????

すると先生(?)は儀式の一通りの手順を教えてくれた。

そして俺達も見様見真似にやってみた。

すると俺は首の左側と右手の甲に、廉は右腕に何やら紋章のようなものが描かれていた。

「それは、「God a crest」神の紋章というものです。

この紋章は一人一人違っているの、各自で調べておいてください。

」

その後学校が終わった後この紋章について調べてみた。

「えーっとー、俺の紋章は水と、これは雷だな。・・・とあった。・・・ってえ？」

そこに書いてあったのは予想していた神とは全く違うものだった。

「海の神、ポセイドン。雷の神、ゼウス。」

儀式と紋章（後書き）

だんだんと空の能力を明かしていくと書いているところちもワクワク
してきます。

海と雷（前書き）

第3話行ってみよう

海と雷

そこにはこう書かれていた。

「海の神ポセイドン。

海を作り出したといわれついる。

水を操ることができる。」

「雷の神ゼウス。

すべての神の王的存在。雷を操る。」

そしてさらに下にこう書かれていた。

「ゼウス、ポセイドン、ハデス。この三人が神の中でも最強の力を誇っているが、一度に一人がこの力を使えば世界は滅ぶ。」と。

かなり斬新に書いてあるが空はその内容を見てしばらく声が出なかった。

翌日、黒羽生徒会長に相談してみた。

「そうか．．．でもそう気に病む事じゃない。

使わなければいいだけの話だ。」

「そうですが．．．」

「しっかし驚いたな。今までゼウスやポセイドンの守護者は見たことあるが、それを一人で持っているなんて聞いたことが無い。」

その後も話は続けて少しは気持ちの整理はついた。
ん？でも残りのハデスの守護者は誰なんだ？

「まーいつか。授業行こーと。」

俺は気になっていたがそのまま授業に向かった。
しかし、そんな矢先にあんなことが起こるなんて知るよしもなかった。

海と雷（後書き）

今回は会話だけになってしまいましたWWW

捕らわれと謎（前書き）

第4話

謎の人物の登場です！

ご覧ください！

捕らわれと謎

朝の9時

突然ケータイが鳴った。

誰だこんな休みに？と思いつながらケータイを取った。

「もしもし。」

「水谷 空か？」

明らかに声がおかしい。変声器を使っているとしたか思えない。

「誰だお前。」

「ケツハツハツハツハツ！怖いね。今どうゆう状況なのかも知らずに。」

「どうゆう意味だ？」

「ケツハツハツ！お前の大事なものを奪った。返して欲しければ午前10時に港の倉庫に来い。一人でだ。」

大事なもの？

「でなきゃこいつらが死ぬぞ！」

「空、絶対に来るんじゃグハアア！」

「水谷君、来ちゃだめ！」

！！

それは、まさしく廉と未来の声だった。

その他にも同じクラスの人達の声も聞こえる。

「いいかあ！こいつらが殺されたくなければ早くこい！でなきや皆殺しだ！」

ブチッ、ツー、ツー。

俺はケータイを強く握り締めた。

「クッソ野郎が！」

俺は自転車に乗って港へと向かって行った。

待ってるみんな！

必ず助けてやる！

捕らわれと謎（後書き）

今回は少し緊迫した場面がありました。
空の今後の活躍にも注目です！

覚悟と誇り（前書き）

久しぶりの投稿でした。今回は長めになりました。じっくりとご覧ください。

覚悟と誇り

午前9時50分

「やっぱりあいつは、こないかー。」

その電話の主は少々呆れた声で言っていた。

「あいつはどうかやらお前らを捨てて自分を選んだみたいだな。」

男は笑いながら言った。

「グッ、、、人質なんて卑怯だぞ！」

「ああ？」

廉は男に腹を蹴られ、力なくコンクリートの床を滑った。

「廉！」

「ハッ！関係ねーなー！俺は勝つためなら手段を選ばねーからな！」

すると男は時計を見て

「ちょうど10時だ。やはりお前らの友達は来なかったな！ここで死んでもあいつを恨むんだな！」

そして、数人の男が持っていたナイフで襲い掛かろうとした。

そのとき。

「まちやがれ！」男達が振り向いた先にいたのは

「空！」

「水谷君！」

「悪いな。来るなどは言われたが、俺そついうの無視するタイプだから。それに、」

???

「それに、仲間が殺されたら俺は死んでも死にきれねー！」

すると空の首と右手の紋章が輝きを放った。

「クツ！なつ、何だ？」

すると誰かの声が聞こえた。

「お前の覚悟は何だ。」
？

「お前の誇りは何だ。」
覚悟？誇り？

「お前の譲れないものは何だ。」

譲れないもの……

「それは……」

そして俺が出した答えは

「今ここにいる仲間だ！俺は、こいつらと一緒にいたい。これからも居続けてほしい！」

だから・・・こいつらを守る為に力を貸してくれ！」

・・・お前の覚悟、しかと受け取った。

これからどうするかはお前次第だ。

するとその光は空を包みだした。

男はすぐ我に返ると

「おい何してやがる！早く撃て！」

すると男達もすぐに我に返り、ナイフから銃や手榴弾に切り替えてその狙いは光に包まれた空に向けられた。

「空！」

「ケッハッハッハッハッ！死ねークソ野郎が！」
ズダアアアアン！」

銃声と爆発音がこだました。

「そ・・・そんな・・・。」

未来はその場にへたり込んでしまった。

「嘘だろ・・・。」

「ケツハツハツハツハツ！ざまあねえなあクソ野郎が！」

男は高笑いしている中、一人の部下が奇妙な事にきずく。

「煙の中に誰がいるぞ！」

「なにに？」

振り返った視線の先には確かに人影のようなものが見えた。

「そ・・・そんな・・・バカな・・・。」

煙が風で取り払われたそのとき中から出てきたのは装備をまとった空だった。

「ちいいい！まだ生きていやがったか！」

撃て！撃って撃って撃ちまくれ！」

男達もひるむこともなく、空に銃を突きつけた。
しかし・・・。

「無駄だ。」

男達が銃を放つと同時に空が手を前に出した。

すると、目の前に水の盾が広がり弾がすべてその盾に止められた。

「なに！」

「まだだ。」

すると今度は水の盾に電気をまとわせ、

「お返しだ！」

電気をまとった水の盾は一気に男達に襲いかかった。

「うおおおおお！」

「ぐああああ！」

空は右手を払い水を取り払うと、そこには一人の男がまだ息をしていた。そう、主犯格の男だ。

「立て。お前がこの程度でやられるはずがない。」

すると男は

「クツ・・・ハツハツハツハツ！よく分かったな。」

「たりめーだ。初め見たときから分かってたよ。お前は・・・悪魔の守護者だ！」

すると男の様子が一気に変わりその姿までもが変わってしまった。

「クツハツハツハツハツ！さあ、もっと楽しませてくれよ！俺はただ力の5割しか出してねーぞ！」

それでも空は動じず、

「・・・あっそ。悪いが俺はまだ本当の力も出してねーけどな。」

「なにい？」

すると空は腰に差していた日本刀を抜きながら、言った。

「こっから本当の勝負だ！覚悟しやがれ！」

覚悟と誇り（後書き）

第5話

遂に空の能力が解放されました！

次話の決戦も注目です！

水神の太刀と雷神の銃（前書き）

第6話

遂に戦いがスタートしました！
ドッキドキ展開に注目です！

水神の太刀と雷神の銃

「こっからが本当の勝負だ！覚悟しやがれ！」

空は腰に差していた日本刀に手を出した。

「いくぜ！水神の太刀『水錬花』（すいれんか）！」

それは太刀の刃は、名のとうり水のように透き通った刃であった。

「ハッ！せいぜい楽しませてくれよなあ！」

すると悪魔は背中から複数の翼を広げ、そこから無数の毒の羽を放ってきた。

しかし空は冷静に太刀を構え、

「水神流月！」

その一振りから大波が放たれ、毒の羽はすべて防がれた。しかし気づいた頃にはそこにいた悪魔は消えていた。

『クツソツ！どこへ行った！』

「クツハッハッハッハッ！こっちだよ。」

！！

そこにいたのは悪魔と、もう一人がいた。

「未……来。」

「空……。」

「その剣を今すぐ捨てる！でねーとこいつの喉元かつ切るぞ！」

そう言うと、悪魔は未来の喉元に爪をあてた。

「やめる！」

「やめて欲しければ今すぐ剣を捨てる！」

「空お願い！こいつを倒して！私のことはいいから！」

俺は迷った。

友を選ぶか、敵を倒すか。

そして出した結論は、

「分かった。悪魔、お前の指示に従おう。」

「空！」

「そうだ。それでいい。」

「ただし、同時にだ。俺が剣捨てると同時にお前も未来をこっちに渡せ。」

「チッ。少し面倒だがまあいい。」

「いくぞ。1・2の3！」

水神の太刀と雷神の銃（後書き）

技名を考えるのに苦労しましたWWW.
次回は悪魔の目的が明らかに！

目的と真実（前書き）

第7話

今回は短くまとめてみました。

目的と真実

そして悪魔は重たそうに口を開いた。

「俺の・・・目的は・・・お前が持っているその・・・力を・・・手に入れる・・・ことだった。」

悪魔はそのまま話し続けた。

「俺は・・・ハデスの守護者の一人としてこの世界に送り・・・込まれた。その・・・守護者の・・・目的は・・・ポセイドンとゼウスの力を手に・・・入れること。」

この3つの力が揃った時・・・どうなるかは・・・知っているだろう。」

「ああ。」

「俺は・・・それを聞いて、本当は・・・こんな事はしたくは・・・なかった。だが、ハデスは手段を選ばない奴だ・・・俺を操り、無理やりいかせた。」

「そんな・・・。」

「ぐっ！」

すると悪魔の身体が光り出した。

「・・・そろそろ・・・限界の・・・ようだ。」
すると悪魔は俺を見て、

「水谷 空よ。これからも・・・このような戦いが続く。俺より・・・

・強い奴は・・・まだまだいる。それでも・・・お前は戦い、仲間
守り抜くか？」

俺はその言葉を聞いて、答えた。

「ああ。たとえ誰だろうと、みんなを守ってみせる。」

その言葉を聞いた悪魔は安心したように、

「そうか・・・。頼んだぞ。俺達の・・・世界のために・・・。」

そして悪魔は光とともに消えていった。

「うつ・・・。」

ドサッ。

俺はその後すぐにぶっ倒れた

「おっ、おい空！」

「水谷君！」

その後のことは俺は覚えていない。

その後のことを知ることになるのはぶっ倒れてから約3日後のこと
になるとは思ってもみなかった。

目的と真実（後書き）

悪魔が少しいい奴っぽくなってしまいました。
まいつか！次も頑張ってください！

その後と決意（前書き）

第8話

空の決意が明かされます。

その後と決意

あれから約3日後・・・

「ん・・・ん。」

俺はようやく目を覚ました。

その後の話によるとあの後俺はぶっ倒れてみんな総動員で俺を病院へ運んだらしい。

何故、救急車を呼ばなかったのかは謎だが、診断の結果、やはりかなりのダメージを負っていた。まあ肩を貫かれたんだから当然か。しっかし病院てのは何もあやしめない。

あるのは白いベッドと天井とあまり旨くない病院のめしくらい。

1日どう時間を潰すかを考えさせられる。

唯一潰せるのはリハビリすつとこと屋上くらいだ。

そして今日も時間を潰すために屋上にいた。

「ここにいたか。」

「廉。」

屋上の入り口から廉が出てきた。

「担当から聞いたんだ。だぶんこっちだって。」

「そうか・・・。」

廉は俺の横に立った。

「気分はどうだ？」

「見ての通り最悪だ。」

「ハハッ！」

「今日は一人か？」

「ああ。今日はみんな取り調べだ。」

そう、あの日以来みんなは先生やら警察やら色々取り調べを受けている。

「にしても、お前本当に無茶するよな。肩を貫かれて血だらけだったのに、あんな戦闘をするなんて。」

「ああ。我ながら本当に無茶したものだよ。今考えてみれば、あんなに動けたのが不思議なくらいだ。」

屋上に風が吹いた。4月の終わりだとゆうのにそれを感じさせないような柔らかい風だ。そんなとき廉が俺に、

「なあ。」

「ん？」

「あの悪魔が言っていたこと、正直どう思う？」

「『戦いは続く』か……。どうだろうな……。でも、俺は続くと思うてる。」

「何故？」

「あいつの言葉。とても嘘を言っているようには見えないんだ。何てゆうかこう俺にすべてを託しているようにも思えるんだ。」

「ふーん。」

すると廉は、

「俺も正直そう思う。それにあいつはハデスに操られたって言うてたし。」

俺は大きく息をした。

「俺決めた！」

「何を？」

「俺、あいつとの約束果たしたい。これからもっとつらい戦いになるかもしれない。けど俺はみんなを守り抜くことを誓う！」

「そーだな！俺も自分の武器を見つけてお前を手伝う！」

そのとき二人は笑っていた。心の底から。

「それに、俺達はあいつらには無いものを持つてる。」

廉はまるで分かっているかのように聞いた。

「何だ？」

ちょうどそれと同時に入り口から未来が出てきた。

「それは……。」

「あっ！ いたいた！ 二人ともー！」

俺は振り返りて言った。

「守る価値のあるものだ。」

その後と決意（後書き）

なんだか少ししんみりしてしまいました。

祭りとトーナメント（前書き）

第9話

今回は少しコメディ路線にしてみました。

ズってやつだな。」

「まさか、ずっと隠れていたのか？」

「ああ。もう一時間くらい前から準備してた。」
「マジかよ……。」

「これで文化祭にも間に合うな！」

ん？文化祭？そういえば来月くらいにあったな。

「なんでも今年は創立150周年記念を記念して一般公開するらしいんだってさ。」

「へー。」

「ちなみにお前はこの文化祭の目玉にあたるこれだ。」

と、一枚の紙を渡された。

「神童学園バトルーナメント？」

「そつ。このトーナメントは三人一組でチームを作り、争う。まあ、ルールに関しては当日知らされることになっているからまだ何なのか分からない状態だ。」

「ふーん。で、後の二人は？」

「俺とこいつだ。」

すると後ろから一人出てきた。

「同じ神話学科の大宮 修二だ。知ってるだろ？」

「よろしく。」

「ああ。よろしく。」

握手を交わすと、

「で、早速なんだが今日打ち合わせをしたいんだがいいか？」

「ああ。いいよ。どこですか？」

「そーだな、それじゃあ神話学科の教室ですか。」

「そーだな。」

そして今日も慌ただしい一日が始まった……。

く……く……く……時は過ぎ、放課後。

俺達は神話学科の教室に集まっていた。

「で、どうやって戦うつもりだ？」

「まあ一試合につき、出られるのは三人中二人まで、時間は無制限。としか聞いてない。」

「連携は？」

「まあ、これからの特訓で色々身につけていこう。」

それから一時間程話し合いが続いた。

「そつえばお前たちの属性は何なんだ？」

「今話したいがさすがにもう遅くなってるから明日にしよう。」

「そーだな。んじゃ明日朝、学園のアリーナ集合な。」

「了解ー。」

こうして学校復帰一日目が終わった・・・。

祭りとトーナメント（後書き）

新たな仲間登場で少し楽しくなってきました。

特訓と連携（前書き）

今回は特訓です。

特訓と連携

翌日、俺達は学園の敷地内のアリーナにいた。

しかし、このアリーナあまりにもデカい。これがあと二つもあるのはすごい……。

「よし！それじゃ始めるか。」

「その前にまずお前と修二の能力を見してくれよ。俺まったく知らない状態なんだけど。」

「おお。そーだったな。まず俺の能力はこれだ。」

廉は手を上に挙げた。すると、廉の手になにかが集まりだした。そして出来たのは、一つの球らしきものだった。

「いくぜ。」

その球を勢いよく下に叩きつけるとそこには激しい突風が起きた。

「おわっ！」

「俺は風の神、クロウの能力を持っている。」

「なっ、なるほどな。」

そして今度は修二の能力を見してもらった。

修二は手を前に出すとそこから炎が出てきた。

「俺は炎の神、レイア的能力を持つてるよ。」

おお。風に炎か。これは頼もしい！

「そんなじゃお互いの能力も分かったとこだし、早速始めるか！」

「「ああ！」」

そうしてかれこれ一時間程朝の特訓をし、授業に向かった。

その日の神話学の授業。

「えー、今日は召還の実習を行う。」

あれ？今日は黒羽さんじゃないのか？

「あの、先生。黒羽さんはどうしたんですか？」

「ああ。黒羽君ならトーナメント明けまでは特訓をするそつだ。」

やはり、黒羽さんもトーナメントに……。

「では、授業を始める。」

その後、トーナメントについて考えていて、授業どころではなかった。

そして授業終了後。

「お前、トーナメントのこと考えてたる。」

「ああ。授業が完全に上の空だった。」

「そつか……。正直不安なんだ。黒羽さんとあたった時勝てるかどうか。」

「そうだな。正直俺は勝てるとは思えない。能力も経験もあっちの方が上だしな。」

「あっちは三年で、こっちは一年か……。差は歴然だな。ハハッ。」

「でも……。」

「でも？」

「俺は悔いを残したくない。もし、来年もあつたとしてもここで逃げるような真似したら俺、一生後悔すつと思う。」

すると廉は笑って、

「だな！やらない後悔よりやった後悔の方がずっと良いに決まっている！」

「そのためにも行こうぜ！特訓！」

「ああ。もう時間は無駄にはできないな！」

そして俺達は放課後の特訓に向かった。

く……く……く……時は過ぎ、トーナメント前日。

俺達は最後の練習をしていた。

「ふう。今日はここまでにするか。」

「だな。もう日も落ちてきたし。今日は早めにあがるか。」

俺達は寮に戻る支度を始めた。

「いよいよ明日か。」

「やることはやったんだ。あとはいかに後悔せずに戦うかだ。」

「ああ。もう迷いは無い。全力で戦うだけだ。」

そして支度を終わると、

「そんじゃ帰りますか。」

「ああ。」

もう迷わない。全力で今の俺達のすべてをぶつけてやる！

特訓と連携（後書き）

なんか色々考えるのが大変でした。

開幕と一回戦（前書き）

第1話

やっとトーナメントが開幕しました。

一回戦の相手は……。

開幕と一回戦

翌日、文化祭の中トーナメントが開幕した。

このトーナメントはまるまる一週間使って行われる。

そして、肝心のルールだが、

「えー、これからルールを説明する。各自配られたリストバンドのモニターにライフが表示してある。それが0になった瞬間に負けとなる。」

「結構分かりやすいな。」

「まあ良いんじゃないね。複雑にしても意味ないし。」

そう言っている中トーナメント表が表示された。

「え……。」

「ウン……。」

「マジかよ……。」

そこに書いてあったのは、

「一回戦でいきなり……。」

三年A組代表対一年B組代表。

。本当にいきなりだった。こんなにも早く、戦うことになるとは……。

「しかもあの後調べたけど黒羽さんのチームって。」

「そう。去年の優勝チームだ。」

「いきなり優勝チームとかー。いけると思うか？」

「たった一ヶ月の特訓でどこまでくらいつけるかはやってみないと分からない。」

そう、いくら特訓したとしてもたったの一ヶ月。まだ連携が完全ではないとゆうことは分かっていた。

「だが……。」

???

「俺達は決めたんだ。絶対に後悔しないってな！」

そういうと二人は笑って、

「そうだな！どんな相手だろうと全力で戦うまでだ！」

「ああ！」

「よし！行くこうぜ！この戦い、楽しんでこーぜ！」

そして俺達は入場入り口に向かった。

~~~~~選手入場入り口

「なあ。」

「ん？」

「今どんな気分？」

「緊張もしてるけどそれよりも今はワクワクしてるよ。」

「そっか……。」

するとアナウンスの音が聞こえた。

『それでは、両者ステージへ。』

俺は大きく息をすると。

「おし！んじゃ行くか！」

「「ああ！」」

俺達はステージへと乗り込んだ……。

## 開幕と一回戦（後書き）

今回は少し短かったです。

次はワクワクできるよう頑張ります！

氷と炎（前書き）

第12話

廉と修二の連携技に注目です！

## 氷と炎

『それでは代表二名は前に。』

「そんじゃ行ってくるよ。」

「ああ。くらいついてこい！」

最初の二人は廉と修二だった。

これは、手の内は最後まで明かさないといい廉の考えから出た結論であった。

そしてどうやら相手の方も手の内を明かさない為なのか、黒羽さんが出ていない。

「やっぱり將軍は最後に出てくるってか……。」

「面白れー。そんじゃ嫌でも引きずり出すしか無さそうだな。」

すると相手の一人、宝城 剛つよしが

「やれるものならやってみな。ただし……。」

今度はもう一人の相手、宝城 香奈恵かなえが、

「出来るのならね！」

試合開始のブザーとともに二人は動き出した。

剛が右へ、香奈恵が左へ、それぞれ散った。

そして香奈恵は地面に手を付き何かを唱えた。

すると地面から二人を囲むように氷の柱が立った。

「これは！」

「まだだ。」

今度は剛が地面に手を付き、何かを唱えた。

すると、二人を囲んだ氷の砦の内側から火柱が立ち始めた。

「ゆくぞ。奥義『氷城炎魔』！」

火柱はどんどん廉と修二に迫ってくる。

「どうする？」

「しゃーない。少し早いが使わせていただきますかね。」

その頃氷の砦の外では剛と香奈恵がただただ眺めていた。

「あの二人、出てくれますかね？」

「ふん。無駄だ。あの氷の砦を破れた者などいない。お前も知っているだろう？」

そう言っている中、二人はある異変に気づいた。

「ん？」

「何かがおかしい。」

すると氷の砦の中から、声が聞こえた。

『「一つ言っておきましょうか先輩。」』







「ああ。どこまでいけるかだな。」

そして熱狂が冷めやらぬまま登場入り口からあの男が現れた。

「ここまでやるとは君たちを少し見くびっていたよ。」

「来やがったか……。」

俺はスクリーンを見ながら、

「ここからが本当の勝負だな。」

そして黒羽さんがステージに上がると、

「さあ、始めようか。」

## 氷と炎（後書き）

技名が大変だった。

次回は黒羽さんの能力が明かされます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2677x/>

---

God a crest ~ 神の紋章 ~

2011年10月28日16時05分発行